世紀末ウィーンにおけるコロマン・モーザーの空間デザインについて

文学研究科　文化財学専攻
川　崎　弘　美

コロマン・モーザー（Koloman Moser/1868-1918/以下、モーザーと略記）は、世紀末ウィーンにおいて活躍した芸術家である。かれは自らを画家と位置づけていたが、絵画、グラフィック・デザインはもちろんのこと、工芸デザイン、家具デザインなどの分野でも才能を発揮した。さらに、画家が手掛けることはまれである空間デザインにおいても、多くの作品を残していた。特に展覧会の展示デザインでは、現在にも通じるような、作品鑑賞を重視して、「間」をとる簡素な空間を創り出していた。

論者は、様々な分野で活躍したモーザーの作品のなかでも、展覧会の展示室のデザインや空間構成、展示方法に注目して、その特徴を検討することで、モーザーの空間デザインの一端を明らかにすることを試みた。なお本論では、展覧会場の空間構成と、各展示室の展示デザイン、住宅の空間構成と、住宅の各部屋のインテリア・デザインを総括する意味で、空間デザインの言葉を用いた。

本論文は、序論、本論四章、結論からなり、具体的な考察内容はそれぞれ以下のとおりである。

序論では、従来のモーザーをめぐる研究状況を確認した。これまでの研究からは、モーザーについては、ヴァイセンベルガー氏の『ウィーン－1890-1920芸術と社会』(1995年)に見られるように、世紀末ウィーンの芸術動向のなかで部分的に紹介されることが多く、その一方でかれの生涯と作品に関しては、ヴェルナー・フェンツ氏の『コロマン・モーザー－グラフィック工芸 絵画』〈1984年〉(Werner Fenz:*Koloman Moser-Graphik Kunstgewerbe Malerei*)などにおいて、大方の基本データがまとめられた。日本でも、藤本幸三氏が『INAX ALBUM 2/コロマン・モーザー』(1992年）において、かれの生涯と作品を紹介しており、モーザーの研究の基礎がほぼ整えられつつあることが理解された。ただし、本論でとりあげる空間デザインに関しては、一部の作例が紹介されている段階にとどまり、モーザーの研究のなかでは、今後の課題として残されていることが把握された。

第一章「モーザーの生涯」では、モーザーの活動内容の推移により、生涯を４つの時期に分けて概説した。第一期は、「誕生から学生時代－初期」とし、芸術家としての基礎が確立された時期にあたる。第二期は、「ウィーン分離派時代－発展期」で、新しい芸術団体の「ウィーン分離派」のメンバーとなり、画家として挿画などを制作しつつ、「ウィーン分離派」の開催した展覧会の展示に関わった時期である。第三期は、「ウィーン工房時代－第一転換期」で、新たに「ウィーン工房」の設立メンバーのひとりとして、インテリアに関する多くのデザインを

手掛ける一方で、「ウィーン分離派」でも、中心となって展示デザインと空間構成を行ないつつ、数年で両方の団体から脱会した時期である。第四期は「晩年－第二転換期」で、この時期には主に絵画作品が制作されている。このような４つの分類に従って、モーザーの生涯を振り返り、活動の変遷を見ることによって、モーザーが代表的な作例を多く残したのは、第二期と第三期の「ウィーン分離派」と「ウィーン工房」であることを指摘した。さらにこの時期にモーザーは、空間デザインにおいても多くの作品を制作していたことを確認した。

第二章「モーザーの展示デザインと空間構成」では、これまでまとめて示されることのなかった、モーザーの展示デザインと空間構成の例を、論者が収集し得た資料をもとにして可能な限り列挙し、その全容を概説した。まず、「ウィーン分離派」での作品をとりあげた。モーザーが展示に関わっていたウィーン分離派展では、展示デザイナーと空間構成担当者という役割があり、どのように展示空間を分割するかという計画と同時に、どのように作品を展示するかという点に重点が置かれていた。そのため、モーザーの関わった展示については、展示デザインと空間構成にわけて、さらに年代順に初期、中期、後期と３つの時期に沿って、それらの特徴を考察した。そして、モーザーが「ウィーン分離派」を脱会した後に設立された、新しい芸術団体「クンスト・シャウ」における作品をとりあげて、モーザーの展示デザインと空間構成の変遷を追った。最後にそれらのなかで、1903年から1904年にかけて開催された第18回展を、革新的な変化が起こった展覧会として位置づけた。

第三章「モーザーの展示デザインと空間構成の特徴」では、第二章で提示した、第18回展の展示デザインと空間構成の新しさを立証するために、まず、芸術的に旧体制に属する「キュンストラー・ハウス」の展示デザインなど、19世紀以前の展示方法と展示空間と比較検討した。次に、モーザーと同時代の展示デザイナーによる、ウィーン分離派展やクンスト・シャウの展示デザインと比較することによって、モーザーによる第18回展の、同時代における先駆性を確認した。また、第18回展の中央ホールに注目し、その展示デザインと空間構成がモーザーの空間デザインの特徴を集約していることを指摘した。

第四章「モーザーの空間デザインの特徴と位置づけ」では、第18回展の展示デザインと空間構成で示された、それまでにない新しさは、住宅のインテリア・デザインと関係があるという仮説を立てて、これを検証した。まず、第18回展が開催された1903年以前に、モーザーが住宅のインテリア・デザインを手掛けていたことから、モーザーによる住宅のなかで、第18回展に直接の影響を与えた可能性を示す住宅として、1900年から1901年にかけて建てられた《モーザー邸》に注目した。モーザーは、そのインテリア・デザインと空間構成において、従来は床に置かれている家具を壁面に嵌め込むことで壁を平面的にし、中央に家具を効果的に置いた簡素な空間を創り出しており、この点に第18回展との共通性が見出された。次に、このモーザーのデザインの新しさについて、モーザーの同時代に活躍した建築家が行なった、住宅のインテリア・デザインに、その源泉を探した。具体的に、スコットランドの芸術家チャールズ・レニー・マッキントッシュと、モーザーと共同で活躍する機会の多かった建築家ヨーゼ

フ・ホフマン、建築家オットー・ヴァーグナー、ヨーゼフ・マリア・オルブリヒ、アドルフ・ロースのインテリア・デザインをとりあげて比較検討し、《モーザー邸》には、従来の指摘にあるように、マッキントッシュとホフマンからの影響が大きいことを確認した。

結論では、各章で考察した結果をまとめ、モーザーの展示空間の現代的意義を指摘した。